

近代日本における動物と人間

—— 鯨・犬・馬を題材として ——

真 辺 将 之

はじめに

近代から現代への社会の変化は、人間と動物との関係を飛躍的に変化させることとなった。犬や猫といったペットを「家族」のように扱う人々が増加しているように、人間と動物との関係は一方において、近くなってきた。しかし例えば、食用に供される牛肉、豚肉、鶏肉などの加工される過程を実際に目にするのが無くなり、その肉がかつて生命ある肉体であったと言われても実感がわかないほどにまで至っている状況などは、逆に動物と人間との距離が開いた側面であるということができるだろう。このように、動物と人間との関係は、近代から現代にかけて大きく変化し、かつ、複雑さを増している。そしてそのような複雑さの増大は、さまざまな難問を我々につきつけている。「動物好き」が増え、テレビで動物の番組を微笑ましく見たり、インターネットで動物の画像や動画を見て癒

される人たちがたくさんいる。犬や猫に対する虐待事件などが起こればすぐにニュースになり、非難の声が高まる。しかしその一方で、動物を犠牲にして得られた毛皮を身に着けていたり、動物実験を経て開発された商品を愛用していたりするような人が多数にのぼることを、我々はどのように考えるべきであろうか。多くの人々は、犬や猫をかわいがり、犬や猫を食べるなんてとんでもないと考えているが、しかし、牛や豚の肉については、何の疑問もなく口にしている。さらに、税金でたくさん犬や猫が殺処分されたり、大学などの研究機関で実験材料にされたりしている現状に声を上げる人は多くない。

このように、動物と人間との関係のあり方は、決して一筋縄ではない、複雑な要素を含んでいる。人間のそのような動物との接し方は、いうまでもなく我々の人間社会のあり方を反映したものであり、逆にいうと、そのように動物と人間との関係のあり方が複雑であるということは、それだけ、人間社会が複雑であるということ

をあらわしている。すなわち、動物を通じて人間社会を考察することとは、普段気づかなかったような人間社会のあり方に気づかされることにもつながる。人間と動物との関係は、歴史のなかで、大きく変化してきており、過去にさかのぼってみることによって、現在の我々のあり方の来歴を知ることにもつながるであろうし、またそうした複雑で変化に富む動物と人間との関係史を考察することは、動物という他者、歴史という過去を通じて、人間社会のあり方・我々自身のあり方を相対化することにつながるであろう。

近年、『人と動物の日本史』全四巻（吉川弘文館、二〇〇九年）、『ヒトと動物の関係学』全四巻（岩波書店、二〇〇九年）、石田戦他『日本の動物観 人と動物の関係史』（東京大学出版会、二〇一三年）など、動物と人間との関係を捉えようという論集があいついで刊行されているのも、こうした問題感心が高まっていることに基づくものであろう。しかしそれらの論考において取り扱われているのは、多くの場合、前近代か、あるいは現代社会の事例かいずれかであり、その間をつなぐ、近代という時代を対象とした研究はまだ非常に少ない状況である。

しかし、現代の動物観の前提や基盤を見るためにも、また現代の動物観を相対化する上でも、近代という時代を検討することは不可欠である。とはいえ、近代に関する研究が全くなされていないというわけではない。本稿では、こうした動物と人間との関係について、近現代、とりわけ前近代と現代とを繋ぐ近代という時代における歴

史的变化を、さしあたりこれまで比較的多くの研究がなされている捕鯨・犬・馬に絞って考察しながら、これからの近現代の動物・人間関係史の課題、さらには、現在を生きる我々の抱える難題について考えていくこととしたい。

一 捕鯨は日本の「伝統文化」か

近年の日本では、捕鯨問題に対する関心が高まっている。オーストラリアの環境保護団体シーシェパードによる反捕鯨活動などがニュースで取り上げられ、そうした反捕鯨活動に反感を抱いている日本人も多い。こうした反捕鯨活動に対して、捕鯨や鯨肉食は日本の「伝統文化」であり、それを外国が否定するのはおかしい、という意見がしばしばみられる。

だが、近年なされてきている歴史的研究によれば、必ずしも捕鯨や鯨肉食は「伝統」と一括して呼べない側面が指摘されている。さらに、「文化」という点に関していえば、人間のあらゆる営みは「文化」と規定することができるのであり、その意味では現在の捕鯨は日本文化の一部であるということも可能であるが、しかしそれは歴史的にずっと続いてきた「文化」ではないし、これからも「文化」であるが故に守らなければならないという論理にそのままつながるものでもないはずである。そしてなにより、以下にみるように、その捕鯨「文化」は近代という時代を通じて大きく変化してきた。

まず捕鯨の手法について見てみよう。歴史社会学者の渡邊洋之は、近代の捕鯨手法の変遷を次のように時期分類している。⁽¹⁾第一期（一八九六年）は、アメリカ式捕鯨の導入の試みがなされる時期である。近世以来の「網取り式捕鯨」が、天候や潮流といった自然的条件の変化や、アメリカ式捕鯨団の日本近海への接近という状況のなかで、次第に不漁に苦んでいき、アメリカ式捕鯨（大型帆船を母船とし、ボートに乗った漁師がモリや捕鯨銃によって鯨を追う方法）を導入しようという試みがなされる時期である。しかしアメリカ式捕鯨は、結局、十分に定着するには至らないまま次の第二期を迎える。第二期（一八九七―一九〇八年）は、ノルウェー式捕鯨の導入期である。ノルウェー式捕鯨とは、捕鯨砲（爆薬を装填したモリを打ち込む装置）を先端に設置した汽船によって捕鯨を行うもので、一八九七年に設立された遠洋捕鯨株式会社および長崎捕鯨株式会社の操業開始を嚆矢としている。以後、ノルウェー式捕鯨が日本に定着していくことになる。第三期（一九〇九―一九三三年）は、東洋捕鯨会社による捕鯨業独占の時期である。日露戦争後に乱立した捕鯨会社が合同して一九〇九年に東洋捕鯨が誕生、独占的な捕鯨が行われることになる。そして第四期（一九三四―一九四一年）は、母船式捕鯨の開始と大資本による捕鯨会社の系列化によって特徴づけられる時期である。大恐慌下における鯨油価格の暴落、コククジラ・セミクジラ・シロナガスクジラといった資源の減少を背景に、日本産業株式会社が東洋捕鯨を買収して日本捕鯨株式会社を設立、

また林兼商店が大洋漁業を設立し、さらにスマトラ殖殖株式会社が捕鯨業に参入して極洋捕鯨を設立し、それぞれ母船式捕鯨をおこなうようになる時期である。母船式捕鯨とは、鯨の解体加工設備を有する母船含む捕鯨船団による捕鯨であり、現在の日本の調査捕鯨もこの方式で行われている。そして第五期（一九四二―一九四五年）は、統制経済下において捕鯨業界が整理され、また捕鯨船が徴用されるなどした時期である。以上のように、捕鯨の手法だけを見ても、前近代に存在していた網取り式捕鯨から、捕鯨砲を用いたノルウェー式捕鯨、さらに母船式捕鯨へと、その手法が大きく変化していることがわかるであろう。そしてこの変化のなかで、沿岸・近海でのみ行われていた捕鯨が、しだいに遠洋へと展開していくことになる。

こうした捕鯨の方法の変化は、単に方法が変わったというだけの話ではない。捕鯨方法の変化は、捕鯨と共同体との関係性にも大きな変容を迫るものでもあったことが渡邊氏によって明らかにされている。つまり、近世における網取り式捕鯨において、捕鯨の役割分担が地域社会における世襲制・身分制と強い結び付きを持っていたのに対し、ノルウェー式捕鯨は、ノルウェーで製造された捕鯨具・捕鯨船を使用するだけでなく、砲手としてノルウェー人を直接雇用して技術の導入が行われており、またその導入期には砲手以外の乗組員として、ノルウェー人はもちろん、ロシア人、中国人など多くの国籍を持つものが乗船しており、労働者の確保という点でも、共

同体や身分制度と密接に関連していた旧来の網取り式捕鯨とは断絶が存在するというのである。そもそも、ノルウェー式捕鯨の導入は、網取り式捕鯨の経営者によって行われたのではなく、新規起業家によって行われた点に特色があり、その意味でも、前近代との連続性が少ないのは当然でもあった。こうした断絶は、次の段階における母船式捕鯨によってさらに大きくなる。すなわち母船式捕鯨において母船となるのは捕鯨工船であり、かつこの母船は従来の沿岸捕鯨で使用されていた捕鯨船に較べて大型化し、燃料も石炭から重油に、機関は蒸気機関からディーゼルへと転換した⁽²⁾。またこの母船式捕鯨の導入にあたっては、ノルウェー人が雇用された。このように、日本の捕鯨技術の導入にあたっては、ノルウェー人が非常に大きな役割を果たしており、かつ前近代における網取り式捕鯨との断絶は極めて大きく、それを日本の「伝統文化」と呼ぶことに対してはかなりの留保が必要なのである。

そして実は、その近代捕鯨Ⅱノルウェー式捕鯨の導入期には、全国各地の漁村で、捕鯨事業所の設置に対する反対運動が起こっている。現在わかっているだけでも、千葉県銚子で東洋漁業株式会社⁽³⁾の事業場に対する抗議運動が起こった事例、和歌山県勝浦で解剖工場を設置したにも関わらず苦情のため営業できなかった事例⁽⁴⁾、宮崎県土々呂港で捕鯨根拠地が営業中止に追い込まれた事例⁽⁵⁾、石川県宇出津町に東洋捕鯨会社が根拠地を設置したことに対し、富山湾全体の漁業者から苦情が起こり政府から捕鯨禁止を命じさせようという運

動が起こった事例⁽⁶⁾、宮城県鮎川で捕鯨所に対する反対運動が起こった事例⁽⁷⁾、青森県三戸郡鮫村で漁民約一一〇〇人が東洋捕鯨事業所を焼き討ちした事例⁽⁸⁾などが存在する。特に青森県鮫村での反対運動は、焼き討ちにより死者・重軽傷者が出るほどの大事件となった。こうした衝突や捕鯨反対の動きが起こった背景は主に二つあり、一つは、地元以外の資本が進出してきたことに対する反発であり、もう一つは、鯨の解体にともない流出する鯨油などが地元漁業に被害を与えることに対する反発であった。地域社会とも、在来技術とも断絶した近代捕鯨の性質がその背後にあったのであり、捕鯨の近代性として近代産業としての捕鯨が伝統的な漁業といかに軋轢を孕むものであったかということを、まさに象徴的に示す事件であったといえることができる。

次に、鯨肉食の問題について見てみたい。はたして鯨肉食は日本の伝統的な食文化といえることができるのだろうか。確かに、長崎、佐賀、福岡、高知、和歌山などの、近世以来網取り式捕鯨が行われていた地域では、鯨肉食が行われていたことは間違いない。だが、はたして日本全国にそれが普く行われていたかどうかといえ、疑問である。明治に入りノルウェー式捕鯨が導入されると、漁獲高の増大と相まって、鯨肉が次第に日本全国に流通するようになっていった。とはいえ、ノルウェー式捕鯨が広がりを見せていた一九一二年の段階でも、赤肉（本皮などの皮下脂肪部を白肉と呼び、それより内側の肉を赤肉と呼ぶ）について言えば、名古屋以東ではほと

んど食されていなかった。⁽⁹⁾ 渡邊洋之の研究で用いられている一九四一（昭和一六）年のアンケート調査によれば、鯨肉を食べるとする割合が新潟で一〇〇%、長野で九四%と高く、捕鯨のさかんな和歌山では全体平均に近い七五%、愛知や滋賀では、それぞれ三一%、三六%と低いものになっているなど、地域によってかなりのばらつきが見られており、かつ「食べる」とした地域においても、その内実は、赤肉ではなく白肉を「縁起物」として非日常的に食していた地域もあり、昭和戦前期に至っても、鯨肉利用に関しては、地域による差が非常に大きかったということができるのである。⁽¹⁰⁾ つまり、戦前において鯨肉食は次第に日本全国に広まっていたとはいえ、昭和戦前期においてすらそれは、決して日本全体の文化といえるような状況ではなかったのである。

ではなぜ、それが日本人の伝統的な食文化と理解されるに至ったのか。それは、第二次世界大戦後の食料難の時期に、それを解決するものとして、鯨肉が大量に供給されたためであった。⁽¹¹⁾ 戦前において、肉類全体に占める鯨肉の供給量は、一九三〇年代にほぼ一〇%程度であったが、戦後、一九四六年に突如四五%にまで跳ね上がる。牛・豚・鶏などの家畜生産が戦争の影響で低落したなか、捕鯨の再開により鯨肉が大量に流入することになったのである。その後次第に鯨肉の占める割合は低下していくものの、一九六〇年代初頭まで三〇%近い比率を保っていた。とはいえ、戦後の復興とともに畜産物の供給が回復してくると、鯨肉は供給過剰となって値崩れを起こ

し、学校給食などに安く供給されることになる。⁽¹²⁾ そして、鯨肉比率の高かった時代に、そうした鯨肉を食したのが、いわゆる団塊世代をはじめとする、現在の日本の人口の多くの割合を占める五〇代以上の世代であった。これら世代は子供の頃から鯨肉食に接していたがゆえに、対外的圧力から捕鯨が禁止されると、自分たちも子供の頃に食べた日本の食文化なのに何故否定されなくてはならないのかと、ある種のノスタルジーを交えながら感じ、そうした反捕鯨論に反発する結果となったのである。

以上のように、捕鯨方法に関しても、鯨肉食に関しても、果たしてそれが日本の文化なのかどうかということには多くの留保が必要なのである。そもそも「日本」として一括して語るには、地域的偏差が大きすぎるし、かつ近代から現代に至る捕鯨方法や鯨肉食のあり方も変化が激しいのであり、「日本文化」か否かというような問い方自体が極めて乱暴なものであるということができようであろう。

二 犬をめぐる「美談」と畜犬献納運動

先ほど鯨を取り上げるにあたって鯨肉食を取り上げたが、犬については、現在多くの日本人はその肉を食べることに對して忌避感を感じており、犬肉食を「日本文化」であると考える人はほとんどいないであろう。しかし実は、弥生時代から江戸時代にいたるまで、犬肉食は日本でも広く行われていた。縄文時代には狩猟の友である

犬は大切に埋葬されている例が多いのに対し、弥生時代になると大切に埋葬される例はほとんど無くなる。稲作の伝播によって狩猟の重要度が下るとともに犬は用無しとなり、大陸からの犬食文化の移入とあいまって食用に供されるに至ったのである⁽¹³⁾。

犬肉食はその後江戸時代まで続き、大名屋敷などの遺跡からは、明らかに食用に供された犬の骨が大量に出土している。このなかには人間の食用ばかりでなく、鷹の餌に供されたものも多かったと考えられる⁽¹⁴⁾。明治以後になっても、徳富蘆花『みづのたはこと』に、西南戦争に際して愛犬「オブチ」が薩摩軍に食用にされてしまい深く悲しんだことが記されているように、地域によっては犬肉食が残存していたようである。しかし他方で、江戸時代以降ペットとして大事にされた犬も多かったことは、数多くの浮世絵などに描かれていることから明らかである。徳川綱吉の「生類憐みの令」はいわずもがな、八代將軍徳川吉宗の時代にも犬鍋を食べた人物が処罰されている⁽¹⁵⁾。大名屋敷からは、食用にされたと思われる犬骨が発見される一方で、大事に埋葬された犬の骨も多い。

以上のように、江戸時代の人間と犬との関係は複層的なものであった。しかしここで興味深いのは、一般的には、近代以降肉食が広まると理解されているのとはうらはらに、江戸時代以前の日本には、犬を食べる文化が存在していたという事実である。むしろ、鯨同様、地域や身分による違いが存在していたものと思われ、その辺りの検証は今後の課題であるが、全般的に言えば、近代になってそ

の肉が食べられなくなっていくという意味で、一般的な「肉食」とは逆の趨勢にたっていたのが犬肉だということができる。

しかし、犬肉食が無くなることは、人間と犬との関係が浅くなったことを意味しない。むしろその逆である。近代に入り、犬は、人間とさまざまな密接な関係を結ぶようになる。そしてそれは現代も同じである。ペット、軍犬、盲導犬、警察犬、番犬その他、社会のなかでさまざまな役割を犬は担っている。

犬の飼いか方も近現代で大きく変わった。前近代／明治期までは、鎖につながず、放し飼いにすることが多かった。犬の側も、特定の家に属するのではなく、街をふらふらとろつき、不特定多数の家に食餌される、飼いか野良犬なのかあいまいな犬も多かった。しかし、明治に入り、狂犬病の流行のなかで、狂犬は見つけ次第撃ち殺す方針が取られた。さらに一八七三年には、畜犬規則が發布され、氏名・住所を記した首輪をつけること、狂犬病にかかったら殺すことなどの義務が飼い主に課されたほか、人を傷つけた犬は撃ち殺して良いとも定められた。犬の飼いか方は代わり、「飼いか野良犬」と明確に区別され、今のよう⁽¹⁶⁾に、首輪とくさり・ひもでつながれて飼われるように変化していくのである。こうして犬は、特定の家庭に飼われ、あるいは軍犬・警察犬のように権力と密接な関係を持つにいった。『愛犬』あるいは文字通り「国家の犬」として、犬は人間との間に濃密な関係を築くことになる。しかしその濃密な関係は、必ずしも犬にとって良いことばかりであったわけではない。

先に述べたように、狂犬病対策として野犬狩りに遭い、戦時中には後述するように供出され撲殺されたりもした。また軍犬の死や、「忠犬ハチ公」の物語などは「美談」として持ち上げられたりもしたが、はたしてそれが「犬」自身の望んだものであったかは甚だ疑問であろう。

「美談」としては、満洲事変の北大営の戦いで死亡したとされる「那智」「金剛」の美談が教科書に掲載されて当時よく知られた。しかし、事実は、教科書に掲載されている話とは異なるらしい。この時の戦闘には、「那智」「金剛」「メリー」の三頭が伝令犬として出撃していたが、激戦の中で兵士と離れ離れとなってしまう。三日後に搜索したところ、「那智」「メリー」の二頭の遺体のみが発見され、「金剛」の行方は結局わからなかったが、おそらく激戦中死亡したものと推察された。しかし、教科書に掲載された話では、死亡したのは「那智」「金剛」の二頭ということになり、「メリー」は行方不明になったとされたのである。⁽¹⁷⁾ おそらく、日本人児童の印象に「忠勇」のイメージを残すのは、カタカナの外国名のメリーよりも、「那智」「金剛」の方が都合が良いと考えられたのであろう。美談というものは、人間の都合の良いように作られるものであり、必ずしも実話に忠実に作られるものではない。

いや単に美談がフィクションであるだけならまだ良い。問題はその美談がまた現実をつくっていくことだろう。教科書や報道によって有名になった「那智」「金剛」は、一九三三年七月五日、陸軍か

らの表彰が決定され、その表彰の中でも最高位の「甲功賞」を受賞、神奈川県逗子市の延命寺境内には、この二頭の慰霊碑が建立された。さらにその後、関東軍から那智・金剛の遺骨が送られ、この延命寺の慰霊碑に葬られたという。本来遺体が見つからなかったはずの金剛の遺骨はどこから持ってこられたのか甚だ疑問である。そしてメリーの名はここに完全に消し去られたのである。⁽¹⁸⁾

それだけではない。この美談をもとに、飼い犬を軍用犬登録しようという動きが後に広まっていく。画像1は、一九四三年八月に「出征」した犬「コロ」

であるが、小旗を振る子供たちに囲まれて送り出されている。このような風景は日本の至るところで見られた。犬たちは、まるで人間さながらに、「○○号万歳」と、送り出されていた。美談が人間を駆り立て、さまざまな現



画像1 昭和館特別展示図録『戦中・戦後をともにした動物たち』（昭和館、2008年）より。

実を作っていたのである。

犬にとって飼い主のものを離れ、戦場に戦死するのは本来、「悲劇」以外の何ものでもない。しかし悲劇は人の心を鼓舞しない。それだけでなく、悲劇というものは、ともすれば、なぜそんなことが起こったのか、なぜ犬が飼い主と離れ離れになった挙句、死ななくてはならなかったのかと、責任追求につながる可能性すらある。しかしその「死」を美談に仕立て上げれば、そのような責任追求は起こるおそれはない。人々は美談に酔い、犬でさえ、あんなに頑張ったのだから、我々人間ももっと頑張ろう、人間に命をかけてまで忠実に尽くす犬に見習って、我々も国のために命を抛つ覚悟で頑張ろう、そのように人々を鼓舞する結果となるのである。

こうした美談が語られ、犬たちも戦争に参加していく一方で、日中戦争が泥沼化していくなか、軍犬以外の犬に対する風当たりが強まっていく。たとえば、一九四〇年二月一三日の帝国議会衆議院予算委員会で、立憲民政党の代議士北吟吉（北一輝の弟で、元早稲田大学講師）は次のような発言を行っている。

此の議会に於きまして過日來飼料の問題が大分論ぜられて居ります、是は戦時中何処の国でもあることでありまして、現に陸軍でも御調査はありませうが、独逸などでは此の前の歐洲大戰中犬猫を殆ど殺してしまつた。是は唯物を食つて大して益する所がない、其の反面豚とか鶏と云ふものはなるべく保存しなければならぬとして努力したのであります、今日御承知の如く皮

が足らなくて困つて居る、食ふ物が足らなくて困つて居る、斯ふ云ふ際に犬猫を撲殺することに陸軍が努力したらどうか。

〔中略〕軍用犬以外の犬猫は全部殺してしまふ、さうすれば皮は出る、飼料はうんと助かります⁽¹⁹⁾、

つまり、飼料にかかる犬猫は撲殺して処分すべきだとの意見を述べたのである。この時、畑俊六陸軍大臣は、「陸軍と致しましては無論此の食糧政策には重大な關係を持つて居ります、又軍用犬に依頼することが多いのであります、此の犬を全部殺して愛犬家の楽しみを奪つたが善いか悪いかと云ふことに付きましては、尚ほ折角研究を致したいと思ひます⁽²⁰⁾」と答えてはぐらかしており、すぐにそうした対応が取られたわけではなかった。

しかし、これ以後、犬の処分を主張する議論は盛り上がりを見せ、一九四〇年八月には「飼犬廃止論」の盛り上がりに対して、毎年動物愛護週間の運営を担当していた日本人道会が「犬の役立つ点」を警視庁の了解を得て人々に説き始めるに至つた。この時、日本人道会理事は以下のように語っている。

犬一頭の皮から靴二足、肉から窒素肥料二貫目取れます、東京市だけでも飼ひ犬月に千五百頭死亡しますからメて靴三千足、窒素肥料三千貫とれる訳です、全国にしますとその十倍から十五倍になります、今迄の飼ひ主は皆その犬を焼いておましたから斯様に処分すればその費用も省けるし一石二鳥で犬を飼うことも無駄にはなりません⁽²¹⁾、

ことはある種「野蠻」な行為として忌避される。にもかかわらず牛や豚については抵抗感なく食することができるのはなぜか。動物に對するダブルスタンダードという意味では、現在の我々もまた矛盾に満ちた態度を取っているのである。⁽²⁷⁾

三 軍馬は「兵器」か「兵士」か

戦争と動物ということでは、馬は犬よりもさらに戦争と関係の深い動物であるということができよう。馬は古くから人間と関わりの深い動物であった。運搬に、騎乗に、さらに農耕にと、さまざまな用途で用いられた。時代劇のなかでも、最も登場する頻度が高い動物であるということができよう。しかし、現在時代劇に出てくる馬は、実は、明治時代以前の日本人が使用していた馬とは異なる。いや時代劇だけではない。普段我々が、競馬や乗馬などで目にする馬は、明治時代以前に我々が目にしていた馬とは体格が大きく異なっている。日清・日露戦争での経験から、日本軍は、日本の在来馬が体格において西洋馬に劣っていることを認識、馬匹改良が急務であると考えに至った。そして軍が飼養する馬だけでなく、戦時に購入・徴発されることになる農村の馬に對しても西洋産馬の種付を強制し、馬匹改良が進められていくことになるのである。その結果、日本の在来馬は姿を消していくこととなり、西洋馬の血を引く体格の良い馬に取って代わられることになるのである。⁽²⁸⁾

このように徹底的な馬匹改良を行ったのは、近代の対外戦争において馬の占める位置が極めて重要であったからである。馬は前近代から戦争に使用されていたが、近代にはいるとその動員量は桁違いに大きくなっていく。日清戦争では約一三万頭、日露戦争では約二三万頭が使用された。平時においてそのような多数の馬を軍において飼養するわけにはいかなないので、戦時には農村から大規模な徴発・購買が行われることになる。日露戦争の二三万頭のうち、約一万五千頭が内地農村からの徴発によって調達され、このほか内地で約五万頭、戦地で約二万頭の馬が購買された。⁽²⁹⁾

西洋においては第一次世界大戦以後軍馬の使用比率は下がっていくが、日本の場合、機械化が西洋ほどに進んでいなかったことや、日中戦争・太平洋戦争の主戦場のひとつであった中国大陸が、道路が未整備で泥濘や山地の多い地形であったことから、軍馬が引き続き大量に動員され、約六〇万―七〇万頭の軍馬が動員された。⁽³⁰⁾

こうした物理的な動員のほか、大同様に、戦争に際して「美談」の題材とされたという点も、ある種の馬の動員であるということができよう。「菊崎号は先行砲車の輓馬たりしが、不幸にも敵弾に腹部を破られ腸は外部に脱出せり、然れども毫も感ぜざるもの、如く急速に陣地に侵入し、尚ほ腸を引摺りつ、前車を輓きて放列の位置に到るや、忽ち斃れて呼吸絶ゆ、我軍に属するものは軍馬すら此の如し、体力に先ちて精神の衰ふるものあらば、須く慚死すべきなり⁽³¹⁾」というようなかたちで、馬ですらこれほど頑張っているのだか

ら人間である国民はもつと頑張れ、と呼びかけるための題材とされたのは犬と同じである。

しかし、戦争に際しての馬に関する記述において、犬とは明確に異なる点も存在する。すなわち、「軍馬程、気の毒なものは動物中にあるまい。今日の行軍を見ては無心の動物といえども実に惻隱の情に堪えない。鞭で打たれ拍車で突かれ、呼吸を迫らして砲車を曳いている。しかし斃れるとその儘道に棄てられる。今日は斃れて路上、もしくは路傍にその儘死んでいる馬を五匹見た。あの大きな体で他愛なくといったいが、怨めしそうな齒を出して、中には大きな目を睜っているものもある。実に哀れである⁽³²⁾」というような、馬の悲惨さを叙述したものが存在することである。これは犬よりも馬の方が、動員数が桁違いに多く、かつ体が大きいこともあり、悲惨な場面を目撃することが多かったことに起因するものであろう。しかし、ここで「無心」と既述されているように、馬は明確に人間と区別された存在として記述され、そうした悲惨さの記述も、日露戦争以前においては、多くが哀れみのレベルに止まるものであつて、仲間意識や、馬に対する強い愛情を感じさせることが少ないこと（ただし皆無ではないが）を、特徴として指摘することができる。

一九一四年に配布された『馬事提要』に「馬は活兵器なり又軍の原動力なり古来武事を称して兵馬と云ひ其の之を総ふる者を司馬と云ふ以て重きを馬に置きたるを知るへし方今学芸日に進み機械月に精く戦闘の方式亦従て改変すと雖も馬の戦に欠くへからざるは毫も

昔日と異なることなし⁽³³⁾」と記述されているように、この時期の馬はあくまでも「兵器」であつた。むしろ、『馬事提要』において、この記述に続いて「夫れ愛馬心を充実し以て調教保育を完成し然る後馬始て用うへし⁽³⁴⁾」と、愛馬心の養成が説かれているように、馬を愛するべきことも説かれてはいた。しかしそれはあくまで大切な「兵器」なのであるから大事にすべきであるという論理なのであつた。例えば一九〇二年という比較的早い時期に「愛馬心」の必要を説いた『軍馬補充論⁽³⁵⁾』では、「軍馬は則ち武器の一種なり銃器帯剣にして能く彼等の精神を標示すること往昔武門兵士の帯刀其『魂』を代表するが如きものあらば軍馬も亦当然騎士の精神を誇示するものであるから、「其精神の標示たることを認め能く活武器の神聖を維持し其愛護保育の關係が軍事的關係に於て如何なる結果を致すべきかを詳らに」すべきだという形で、愛馬心の涵養を解いている。馬は飽くまで「兵器」であり、愛馬心とはその「兵器」を大切にするという範囲を超えるものではなかつたのである。

だが、こうした「兵器」という位置づけは、昭和初期に変化を見せる。一九三八年に大本営陸軍部が配布した『従軍兵士の心得』には、次のような記述がある。

馬は無言の戦士である、彼等にも故郷もあり飼主もあり又親兄弟もあつたであらう、それが遙々と戦場に送られ黙々として忠実に働き、力尽きては苦しさも訴へることなく異郷の土と化するのを見るとき、誰か一掬の涙なきを得るであらうか、可憐なる

彼等も亦我等の戦友である、労つてやるべきではないか、情を知らぬは真の軍人ではない、路傍一本の草でも労る心さへあらば馬を慰め得るのである、「中略」馬は主人に似ると云ふ、乱暴な主人に扱はれると乱暴になり、忠実な主人に扱はれると忠実になるものである、主人の心はよく馬に通ずるのである、⁽³⁶⁾

この『従軍兵士の心得』には「兵器を大切にし、資材を愛護節用せよ」という項目もあるが、この「情を以て馬を愛護せよ」の項目はそれとは別に立てられ、かつ兵器の項目より先に来ている。この時点で、馬は「兵器」ではなく、「兵士」になったのである。

単に軍の編纂物の記述がそうなっているだけではない。その背後には、国民の馬に対する観念の変化が存在していた。全国各地には、戦時に際しての軍馬の供出に関わる「軍馬碑」と呼ばれる碑が今でも残されているが、この軍馬碑を研究した森田敏彦『戦争に往った馬たち』⁽³⁷⁾は、以下のように非常に示唆的な考察をしている。

長野県において森田が調査した軍馬碑は、日露戦争期の軍人が建設したものと、軍馬を供出した農民（名望家層）が建築したものの大きく二つに分けられるが、前者は、軍人が戦場で使役した馬の功績を誇ることによって、自らの功績を誇ろうという意図のものが多く、後者については、飼い主が馬を供出した事実のみを記すもの、および、単に事実を記すのみでなく、有事にあたつて国家に貢献したことを強調するものが多いという。いずれにせよ、軍馬の功績は強調されておらず、名望家として物資を供出したという点が記され

ていることにおいて共通しており、そこにあるのは愛馬を悼む気持ちというよりも、自らの国家への貢献の強調であるということができる。

しかし日中戦争期以降の軍馬碑はそうではない。森田によれば、まず何より、碑文の中に「出征」の文言が含まれるものが顕著な増加を見せるという。長野県の日中戦争・第二次大戦期の軍馬碑一〇六基のうち、「出征」の文言が含まれているのは約半数の五七基であり、逆に「徴発」の文言が記されているのはわずか七例となっている。馬がより人間に近い存在となり、文字通り動物兵士として扱われているのである。また個人や有志によって設立された碑がほとんどだった日露戦争期に比べ、この時期には、帝国在郷軍人会や軍友会などの団体によって建設された碑や、高級軍人などの揮毫が見られる碑が少なくないなどの特色も指摘されている。一方には在郷軍人会などの軍事援護組織の農村への浸透という背景があるが、他方で、前述の「出征」記述の増加にも見られるように馬の地位向上を示すものと言えるであろう。

このように、軍馬碑を通してみても、馬が、時代が下るにつれ、兵器ないし物資としてよりも兵士として扱われていくようになる様子を窺うことができる。そしてこれを裏付けるように第二次大戦期の従軍記などには馬を心から愛する記述が多くみられるようになる。それらは、単なる憐みや忠勇譚ではなく、馬を仲間あるいは家族のような気持ちで心から愛し、何物にも代えがたいものとして記述す

る筆致が顕著なのである。こうした例は枚挙に暇がないが、たとえ
ば、「ひと時も離れたことのなかつた愛馬吹雪の戦死したとは肉親
の死も同じだつた〔中略〕馬の食糧が尽きたとき僕は最後の乾パン
まで仲良く分けて食べさせました。〔中略〕「死んだ今でも」ぢつと
僕を見つめているやうで何度夢に見たかわかりません⁽³⁸⁾」「私は呂京
号の首に縋り「お前が俺を残して死んぢやいけないシツカリしてく
れ」と大声で励ましましたが彼〔呂京号〕は恰も人間の如く目から
ボロ／＼涙を流しつゝ、絶命しました、その時私は泣けて泣けて戦友
の顔さへ見えませんでした私は今肉親の兄弟を失つたやうな気持ち
である⁽³⁹⁾」といった具合である。

そうした馬への視線は兵士だけのものではなかった。送り出す農
家の側も、例えば「昭和十三年（一九三八）七月、私たち農家にとつ
て、かけがえのない農耕馬に徴用令が来た。〔中略〕国家の命令と
はいえ、生涯長野県白馬村で、家族の一員のようにしていた馬を、
差し出さなければならぬ無念さに皆で泣いた。家族全員で「武運長
久」と書き、それをこよりにして、馬の立て髪にかたく結んで、今
まで食べさせたことのないご馳走を、馬桶に入れて食べさせて門出
を祝い、私が手綱を取って集合所の小学校まで連れて行つた⁽⁴⁰⁾」とい
うように、馬を家族同様に思っていたのである。

この背後に、どのような変化が存在するのかは今後検討されてい
くべき課題である。軍隊生活における馬の位置づけや、農村におけ
る馬の飼養のあり方に何らかの変化が存在しており、それがこうし

た馬に対する見方の変化につながっていた可能性もある。しかし、
単にそれだけではなく、馬だけに限られない、動物一般に対する考
え方の変化もまたそこにはあるのではないか。第二次大戦時には過
酷な部隊生活を癒してくれる存在としてペットを飼育する日本軍兵
士も多かった。中国戦線では犬や猫を飼う兵士が多かったが、南方
では猿を飼う兵士も多かったといわれる。なかには豹をペットとし
て飼育していた人物もいた⁽⁴¹⁾。ただし、こうして人間の「戦友」とし
て扱われる動物が増えていく一方で、国内では戦局の悪化に伴って
各地の動物園でたくさんの動物たちが毒殺されていったのも事実で
あり、先述した豹も、部隊の移動にともない上野動物園に移送され
たものの、約一年後に毒殺されてしまっている。

動物を愛する気持ちの増大という点では、一九〇二年に、日本で
最初の動物愛護団体である動物虐待防止会が設立されている。同会
はのちに動物愛護会と改称され、大正年間に設立された日本人道会
と協力して動物愛護精神の涵養に力を尽くした。日本人道会が畜犬
献納運動に際して、飼犬の撲殺疑惑に対する広告を出していたこと
を述べたが、こうした動物愛護運動が戦時にまで存続しつづけてい
たことは考えてみれば驚くべきことであり、人々の動物観の変化を
物語っているよう。なお現在日本で動物愛護の対象としてイメージさ
れるのは主に犬や猫であるが、明治から大正にかけては牛馬の保護
を訴える声が多かった。明治時代、犬や猫をペットとして飼う家庭
はまだ今ほどは多くなく、逆に牛や馬は輸送手段として多く用いら

れており、農村人口も多かった日本では最も人間とのかかわりが深い動物であったのである。それはともかく、このような動物観の変遷を、犬や馬といった個別の動物ごとではなく、総体としてとらえて研究することは、今後の動物と人間の関係史を考えるうえでは不可欠の課題であろう。日本とは異なり、西洋近代の動物観については、たとえばキース・トマス『人間と自然界 近代イギリスにおける自然観の変遷』⁽⁴²⁾や、ジェイムズ・ターナー『動物への配慮 ヴィクトリア時代精神における動物・痛み・人間性』⁽⁴³⁾といった名著をはじめ、多数の研究がなされている。日本においても、こうした研究は可能なはずであり、今後、こうした西洋近代の動物観との比較を交えながら、日本近代の動物認識を明らかにし、さらに東アジアの動物認識の比較検討へと進めていくことが今後必要となってくるであらう。

おわりに

以上、本稿では近代日本における動物と人間の関係のあり方を、鯨・犬・馬という、これまで比較的研究の多い対象をもとに論じてきた。前近代と現代とをつなぐ近代という時代は、歴史のなかでも最も変化の大きい時代である。本稿で繰り返し述べてきたように、近代から現代にかけての人間と動物との関係のあり方は、変化に富み、かつ複雑なものである。にもかかわらず、近代の動物と人間と

の関係に関する歴史的研究は決して盛んであるとはいえない状況にある。またそのほとんどが、先に述べたように、個別の動物を対象とするもので、総体としての動物認識に関しては研究が極めて少ない状況にある。

また、先にも述べたように、西洋の動物観に関しては研究が多く、かつそれと日本との比較も少ないがらなされている。しかし、東アジアという視野で、近現代の動物と人間との関係を比較した研究はほとんど存在しない。しかし、東アジアは地理的にも近く、相互の影響関係も相当にあるはずである。

この相互の影響関係という点についての一例として、筆者が個人的に興味のある「畜魂碑」「獣魂碑」について述べておきたい。本稿で「軍馬碑」について触れたが、動物を供養し慰霊碑を建てる習慣は日本各地に存在していた。現在でも、畜産施設や動物実験施設、さらに動物展示施設などには、動物慰霊碑が設置されている事例が多い。こうした慰霊碑は、日清戦争後、日本が領有することになった台湾においても、屠畜場などに設置されることになった。第二次大戦での敗戦後、日本統治時代に建てられた石碑などの多くは破壊されたが、しかし「畜魂碑」「獣魂碑」といわれるこの動物慰霊碑については、破壊されず、残った事例を台湾で複数確認することができる。筆者も台湾に訪れた際に台北市内のそうした碑文を探してみたが、四つの碑の現存を確認できた（画像3はそのうちのひとつで、天寶聖堂宮という道教寺院の前に所在。もともと台北市大同区

蘭州街の屠畜場に設置されていたものが移設された。それらはいずれも元々置かれていた場所からわざわざ移転されたり整備されたりしており、明確に保存しようという意図が感じられるものであった。日本統治時代の痕跡を消す中で、なぜこの畜魂碑だけが意図的に残されたのか。ここから先は実証的研究がなされるべきであろうが、その背後には、台湾に住む人々の動物観の変化が背後にあるように思われる。こうした形での、動物観の相互影響関係などについても、今後研究が進められていくべきであろう（台湾の畜魂碑・獣魂碑については、筆者も現在別稿を準備している）。

本稿で繰り返し述べたように、動物と人間の関係は、複雑で矛盾



画像3 台北市に残る畜魂碑（真辺撮影）

に満ちたものである。社会が複雑さを増していくなかで、こうした動物との関係の複雑さはさらに増大していくものと思われ、そのことは社会において多くの摩擦を呼び起こしていくのではないかと想像される。たとえば、捕鯨、動物実験、毛皮、いずれも賛成・反対の立場の人がおり、その結果、感情的対立から暴力の行使に至ってしまうことすら間々見られる。動物よりも人間の方が大切に扱われるべきであると考える人々が多くなる一方で、ホームレスが寒さに凍えるなか小綺麗な服を着せられた小型犬が暖かい家の中で飼い主に可愛がられている。環境保護と動物愛護との間にも自然への介入のあり方についての考え方の相違が存在するし、さらにこのどちらにも無関心ないし反発心を持つている人々も存在する。どの考え方にもそれなりの理屈がそなわっていることが多く、根本的な価値観が異なっている以上、話し合いで合意に至ることも難しい。

二年ほど前、ネット上に、犬の虐待のシーンとされる画像が公開された。それら画像では、犬が首を紐で締めて殺され、首を切断され、皮を剥がされて、肉を切り刻まれていた。ネット上では非難の声が上がり、画像が拡散され、犯人探しがはじまった。その結果、それは中国に住む大学生によるものであることがわかったが、実はそれはその犬を食用にするために行ったことであることもわかった。「犬を食べるなんて」とそれでも非難する人が存在する一方で、「食べるためなら仕方ない、我々だって牛や豚を食べる」として、怒りを収める人も多く、騒ぎは沈静化していった。しかし、食べるため

であれ虐待のためであれ、当の犬にとっては殺されることには何の変わりもない筈である。しかしなぜ食用ならよくて虐待なら駄目なのか。牛や豚を食べることはよいのに犬を食べることを批判する人がいるのは何故なのか。また、多くの人が認める動物実験は、動物にとって耐え難い苦痛を与えることも多い。人間の側が、実験は有益な結果をもたらすから仕方ないのだと正当化しようとも、当の動物はその利益を受けるわけではなく、耐え難い苦痛を受けるという点では虐待と何ら変わらない。

このように、現代社会における人間と動物の関係はきわめて複雑かつ理不尽なものである。しかしそれは、複雑・理不尽であると同時に、これまで見てきたように変わりうるものである。これから先、いったい人間は動物とどのような関係を結んでいくのか、それを決めるのは我々人間以外にはありえない。動物と人間との関係を歴史的に考察することが、こうした難問に対して何らかの回答を与えるわけではもちろんない。しかし、複雑で変化に富む動物と人間との関係史を考察することは、動物という他者、歴史という過去を通じて、人間社会のあり方、我々自身のあり方を相対化することにもつながる。動物の歴史を通じて人間社会を考察することで、普段気づかなかつたような人間社会のあり方に気づかされることも多い。その意味では、我々の社会のあり方を客観的にみつめ、それをこれからどう「変化」させていくのかを考えるための、貴重な「材料」を提供することは間違いなく、人間と動物の歴史についての、さらな

る研究の進展が必要とされているのだといえよう。

注

- (1) 渡邊洋之『捕鯨問題の歴史社会学』（東信堂、二〇〇六年）。
- (2) 馬場駒男『捕鯨』（天然社、一九四二年）。
- (3) 大野獅吼『銚子物語』（『文芸倶楽部』一三一九、一九〇七年九月）
- (4) 綾部策雄『諾威式捕鯨に対する吾人の希望』（『大日本水産会報』三三五、一九一〇年八月）。
- (5) 綾部策雄『諾威式捕鯨に対する吾人の希望』。
- (6) 綾部策雄『諾威式捕鯨に対する吾人の希望』。
- (7) 近藤勲『日本沿岸捕鯨の攻防』、山洋社、二〇〇一年。
- (8) 八戸市史編纂委員会編『新編八戸市史近現代資料編二』（八戸市、二〇〇八年）。
- (9) 安藤俊吉『我国に於ける鯨体の利用』（『大日本水産会報』三五五、一九二二年四月）。前田敬治郎・寺岡義郎『捕鯨』（日本捕鯨協会、一九五二年）。
- (10) 渡邊洋之『捕鯨問題の歴史社会学』。
- (11) 森田勝昭『鯨と捕鯨の文化史』（名古屋大学出版会、一九九四年）。
- (12) 渡邊洋之『捕鯨問題の歴史社会学』。
- (13) 西本豊弘『イヌと日本人』（西本豊弘編『人と動物の日本史Ⅰ動物の考古学』、吉川弘文館、二〇〇八年）。
- (14) 西本豊弘『イヌと日本人』。
- (15) 西本豊弘・新見倫子編『人と動物の考古学』（吉川弘文館、二〇一〇年）一五八頁。
- (16) 今川勲『犬の現代史』（現代書館、一九九六年）。
- (17) 今川勲『犬の現代史』。
- (18) 今川勲『犬の現代史』。
- (19) 『帝国議会衆議院委員会議録一一四昭和篇』（東京大学出版会、一九九六

年)二〇一頁。

- (20) 『帝國議會衆議院委員會議録一一四昭和篇』二〇一頁。
- (21) 「犬も死して皮を残すぞ。畜大廃止論」に対する日本人道会の対策」(『東京朝日新聞』一九四〇年八月二五夕刊)。
- (22) 井上こみち「犬やねこが消えた」(学研、二〇〇八年)。
- (23) 「畜大は撲殺せず」(『読売新聞』一九四四年四月七日広告欄)。
- (24) 今川勲「犬の現代史」一二八ページに写真が掲載されている。
- (25) 井上こみち「犬やねこが消えた」。
- (26) 井上こみち「犬やねこが消えた」。
- (27) 近年、こうした人間の動物に対する矛盾に満ちた態度に焦点を当てたハーツォグ『それでも僕らは肉を食う』(柏書房、二〇一一年)が日本語に訳され、話題を呼んだ。同書では、そうした矛盾に満ちた態度をそのまま肯定するような結論になっているが、伊勢田哲治『動物からの倫理学入門』(名古屋大学出版会、二〇〇八年)などで紹介されているように、哲学や倫理学においては、こうした矛盾をいかにして解決していくべきかという問題がホットなトピックとして、議論されている。
- (28) 武智銀治郎『富国強馬』(講談社、一九九九年)。農村での種付については大瀧真俊『軍馬と農民』(京都大学学術出版会、二〇一三年)が詳しい。なお、日清・日露戦争で軍馬が上手く働かなかったのは、体格の問題だけでなく、去勢を行う習慣がなかったために性質が喧噪となっていたことも影響しており、これへの対策も軍は行った。こうした去勢策については帝國競馬協会編『日本馬政史』四(帝國競馬協会、一九二八年)七〇八〜七三四頁を参照。
- (29) 陸軍省編『日露戦争統計集第一二巻軍馬』(東洋書林、一九九五年)。
- (30) 武智銀治郎『富国強馬』。
- (31) 鳳秀太郎編『日露戦役話集大戦余響』(博文館、一九一七年)四四〜四五頁。
- (32) 多門二郎『日露戦争日記』(芙蓉書房出版、二〇〇四年)三〇頁。

- (33) 陸軍省編『馬事提要』(陸軍省、一九一四年)一〜二頁。
- (34) 陸軍省編『馬事提要』三頁。
- (35) 山内文太郎『軍馬補充論』(金港堂、一九〇二年)。
- (36) 大本営陸軍部『従軍兵士の心得』(大本営陸軍部、一九三八年)一四〜一五頁。
- (37) 森田俊彦『戦争に往った馬たち―軍馬碑からみた日本の戦争―』(清風堂書店、二〇一一年)。
- (38) 「最後のパン分けあった吹雪号よく死んだ森上等兵が涙の執筆」(『読売新聞』一九三九年一月一五日第二夕刊)。
- (39) 『信濃毎日新聞』一九三九年四月七日。
- (40) 曾根高末吉「馬とわたし」(『白馬の歩み―編纂委員会編『白馬の歩み白馬村誌』第3巻社会環境編下、白馬村、二〇〇三年)一九四頁。
- (41) 成岡正久「豹と兵隊」(芙蓉書房、一九六七年)。
- (42) 法政大学出版局、一九八九年。原書はKeith Thomas, *Man and the Natural World: Changing Attitudes in England 1500-1800* (Penguin Press History, 1983)。キリスト教神学に裏打ちされた、動物に対する人間の優越という認識や、人間と動物との間には明確な境界線が存在するというような動物観が、近代化のなかで次第に変容を遂げ、人間と動物との境界を曖昧にし、動物虐待への批判的な眼を登場させ、それが肉食との間に摩擦をもたらす過程を描いている。
- (43) 法政大学出版局、一九九四年。原書はJames Turner, *Reckoning with the Beast: Animals, Pain, and Humanity in the Victorian Mind* (Johns Hopkins University Press, 1980)。進化論や科学の発達によって人間が超自然的存在ではなく、動物の直接の子孫であるという認識を持つようになるとともに、「痛み」に対する感受性の深化が、人間だけでなく動物に対する扱いをも変化させるに至り、動物虐待を批判し、動物の「苦痛」への配慮を必要とする考えがひろまっていく過程を追い、そうしたなかで生まれた動物愛護運動の発展・展開過程やその性格について論じている。

付記

本論文は二〇一三年一月二日に中国・天津の南開大学で行われた第五回東アジア人文学フォーラムでの報告原稿に加筆・修正を加えたものである。